

令和八年度

龍谷大学付属

平安中学校入学試験問題

受験番号

国語

解答上の注意

- 一. この問題用紙は「はじめ」の合図があるまで開いてはいけません。
- 二. 答えはすべて解答用紙の決められたところに書きなさい。
- 三. 解答用紙の決められたところに受験番号を書きなさい。氏名を書いてはいけません。
- 四. 問題を読むときに、声を出してはいけません。
- 五. 問題内容についての質問は受けません。
- 六. 印刷が読みにくいときは手をあげて監督者を呼びなさい。
- 七. 「やめ」の合図があつたら、解答用紙をおもてに向け、問題用紙を解答用紙の上に置いて、回収が終わるまで席を離れてはいけません。（問題を持ち帰ることができません）

[illegible]

□ 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

【1】私たちは毎日、雑談をしながら生きているといってもいいでしょう。言い換えれば、私たちは、ほぼ100%、雑談によって人とコミュニケーションをとっているのです。

ところが最近、雑談が苦手、うまくできないという人が増えてきています。

私は大学教授という職業柄、18歳から20代前半の大学生や、大学を出て就職した卒業生といった人たちと付き合う機会が多いのですが、彼らと接している中で常々感じていることがあります。

それは会話力のアンバランスさです。

友だち同士ではすぐ話が弾むのに、自分と立場の違う人、世代の違う人、異なった環境にいる人と対峙した途端、「はあ……」「あ、いや、その……」などと会話が急停止してしまうのです。

「おはようございます」「お疲れさまでした」——礼儀正しくあいさつはできる。

「〇〇をお願いします」「●●してください」——伝えるべき要件は伝えられる。

「▲▲はいつ到着ですか?」「月曜日のご都合は?」——聞くべき要件も聞き出せる。

しかし、そこで終わってしまふ。つまり「要件しか話せない」ということです。

「要件さえ伝われば、それでいいじゃないか」——確かにそれはそうでしょう。しかし、「要件しか話せない」のでは、世の中を渡っていくことはできません。

要件、たとえば仕事の話、契約や交渉、連絡に報告……これ

らを「意味のある会話」だとしましょう。しかしこれらが日常生活、社会生活における会話全体に占める割合は、ほんのわずか。そのほとんどが「意味のない話、ムダ話」——雑談なのです。また一方で、とくに若い人の中には「意味がない話なら、無理にする必要なんてないのでは?」「雑談なんかして何になるの?」「時間のムダ」などと思う人もいます。気持ちばかりですが、この考えは×。

実際に会社でも、上司と仕事の話はできるけれど、雑談やプライベートの話をするのは苦手、そんな話はしたくない、という人が増えていきます。

「雑談＝中身のないムダ話」は正解ですが、「雑談＝必要のない話」というのは大きな間違い。①雑談には「中身がない」からこそ、する意味があるのです。

極論すれば、私たちの会話には「要件を伝える会話」と「それ以外の会話」の2種類しかありません。そして「雑談」とは「要件以外の話」です。

たとえばビジネスの現場は、交渉事や契約、確認といった中身のある「商談」と、「最近、調子はどう?」「ゴルフ行ってる?」といったビジネスとは無関係の中身のない雑談で成り立っています。

では、中身のない、ビジネスに関係のない雑談が持つ意味とは何か。

たとえばそれは、以降の商談をスムーズに運ぶための「地ならし」的役割です。

雑談というのは人間関係やコミュニケーションにおける「水回り」的な役割を持っています。わかりやすく言えば、若い人たちやお笑い芸人たちがよく言う「空気読めよ!」の「空気」、これを作るものが雑談です。その場にいる人たちと同じ空気を

共有するため、場の空気を作るために雑談があるのです。

人間関係そのものを家にたとえれば、要件のある、意味のある話ができる力、あるいは日本人として日本語がきちんと話せる力などが土台・基礎工事になります。

その上に一個人、社会人として必要な人間性という骨組みがあり、さらにさまざまな社会的経験を積んで身につけるマナー、人との付き合い方、コミュニケーション能力で「家」が形作られていきます。

その中で「雑談」「雑談力」の担う役割が水回りなのです。

外観に直接は表れてこないけれど、建物にとつて欠かせないのが水回り。ここが詰まったままでは、どこか苦しくて居心地の悪い家になってしまうでしょう。

雑談とは、家における **A** のごとく、**B** を気話まりなく、スムーズに動かしていくために不可欠な **C** のフアクターなのです。

【2】人と会ったらあいさつをする、これは最低限のマナー。友人知人、仕事関係で付き合いのある人、通りすがりの顔見知り、まったくの初対面の人……。相手はさまざまですが、朝会えば「おはようございます」、昼間会えば「こんにちわ」、初対面なら「初めまして」などなど。人と話すのが苦手という人でも、あいさつぐらいはできるでしょう。いえ、社会人ならできて当たり前です。

あいさつは、雑談をするための絶好のキッカケになります。ただ注意してほしいのは、あくまでも「キッカケ」という点。つまり「あいさつⅡ雑談」ではないのです。

いつもの、型どおりのあいさつが「雑談」に成長・成立するかどうかは、あいさつを交わした「あと」に、かかっています。

「おはようございます」「朝晩は冷え込みますね」

「景気はどうですか」「いや、よくないですね」

「儲かりましたか」「いやあ、ボチボチでんな」

これではまだ、ただのあいさつレベル。ここから雑談に発展させるには、このあとに「もうひとネタ」、プラスαが必要になります。

たとえば朝、出勤時に近所の人とすれ違ったとしましょう。最初はもちろん「おはようございます」とあいさつ。

さて、ここからです。あいさつのほかにひと言、ちよつとした話題を付け加えてみましょう。何でもいい、そのときにたまたま目についたことでも構いません。たとえば……、

「あれ、この店、改装中になってますね」

といった感じで、ひと言プラスしてみます。すると……。

「ああ、来週、新しい居酒屋がオープンするらしいですよ」と相手の言葉が返ってきます。

「また若者向けのチェーン店ですかね？」

「どうでしょう。静かに飲める店のほうがいいんですけどね」

「開店したら、一度は様子を見に行かなきゃ」

「じゃあ、そのときはご一緒に」

「いいですね、ぜひ」

これだけで、ただのあいさつが「雑談」になりました。

あいさつのあとで交わす、プラスαのほんの少しのやりとり。時間にして5〜10秒程度でしょうか。でもこの、たった5秒、プラスαの、あいさつ以外の言葉があるだけで、お互いの相手

に対する感情は大きく変わってきます。気持ち打ちとけて、「あの人は感じがいい人だ」となるものなのです。

いつも型どおりのあいさつしかない相手と、短くてもこうした雑談をしたことのある相手というのは、②その人の中で自然にポジションが変わってきます。それが人情というもの。雑談を交わすことで、それまでの「顔見知り」が、それ以上の存在になります。相手に対する安心感・信頼感さえ覚えることも。

ひと言足すことで、相手からももうひと言返ってくる。あいさつを交わしたあとの些細なやりとりが雑談であり、コミュニケーションにおいても非常に重要な意味を持ちます。

あいさつプラスα。

もっとも簡単に誰もが始めやすい雑談の基本スタイルです。

【3】一般的に、男性よりも女性のほうが雑談が上手だといわれているようです。

私は、たまに仕事の合間にホテルのレストランで昼食をとることがありますが、ランチタイムは※OLさんに若い主婦同士、年配の女性グループ……と、本当に女性だらけ。

それでもOLさんは昼休みが終わると帰りますが、他の人たちは簡単には終わりません。

そして食事をしに来ているのか、話をしに来ているのかわからなくなるくらい、延々と雑談で盛り上がっている。

彼女たちはどんな話をしているのだろう——そう思って耳をそばだてて聞いてみると（私も相当に暇なのですが）、彼女たちは、とにかく「積み上がらない話」をしています。

しかも話題にまとまりや一貫性がない。すごく「とっ散らかっている会話」なのです。

そういう聞き込み（？）を繰り返すうちに、あることに気づ

きました。それは、話をグッとまとめるような、いわば「最後のオチ」がキチンとあるような話をしている人が非常に少ないということです。

要するに、話に結論がない。まとめがないわけです。

対して男性というのは、雑談をしていてもある程度の段階でなぜか締めにかかってしまう傾向が強いのです。一般論を持ち出したり、あるいはその問題の要点をまとめて「つまりさ、こういうことだよ」と。

するとその話題はそこで終わりになります。なぜなら、1が出てしまうから。その1に対して2、3を唱えたら、そこからは4ではなくて5になっちゃいます。

たとえば「○○さんは遅刻常習犯だけど、その言い訳が見事なんだよ」という話に「でも遅刻はいけないよ。ルール違反だから」と返されたら、そこでこの話はほぼ終了。「ま、確かに、アンタが正しい」となるしかない。確かに、それ以上の結論はないのですから。

そんなときは※紋切り型の結論を言うのではなく、

「へえー、どんなこと言うの？」

『荷物を抱えたおばあさんに病院までの道を聞かれて、一緒に行ってあげた』とか

「確かにそりゃ、怒りにくいよな。そうそう怒るといえば、こないだ○○さんが」

こんなふうにゆるい感じで話が流れるほうが、グンと会話が弾みます。

ある話題の周りをグルグルと回っているようなゆるさ。「だから何？」と言われたら元も子もない話。いい意味での柔軟性、それこそが雑談なのです。

雑談はあくまで雑談であつて議論ではありません。

結論の是非はこの際どうでもいいし、誰もそれを求めてはいません（この「誰も求めていない」が重要なポイント）。

だからこそ、

無理に話をまとめようとしない。

抽象的・一般論的な結論を出さない。

オチを作らずに、どこまでもズルズル引き延ばしていく。

結論に至る前に、小気味よく（時には目まぐるしく？）話題を変えていく。

これが雑談を続ける、雑談を広げる秘訣です。

（ 齋藤 孝 『雑談力が上がる話し方』 ）

※（文中のことばの意味）

対峙：たがいに向かい合うこと。

フアクター：要因・要素。

OL：会社で働く女性。

紋切り型：型にはまった表現や物事のやり方。

問 1 ——— 線①「雑談には『中身がない』からこそ、する意味がある」とありますが、「雑談」が必要なのはなぜですか。文中から三十一字でぬき出し、はじめとおわりの四字

で答えなさい。

問 2

A

C

 にあてはまることばを、文中から

A

 は三字、

B

 は四字、

C

 は九字でそれぞれぬき出しなさい。

問 3 ——— 線②「その人の中で自然にポジションが変わってきます」とありますが、どういうことですか。最もふさわ

しいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア ただのあいさつが、気持ちが打ちとけて雑談に発展すること。

イ ただの顔見知りが恋愛対象となり、好感を抱く存在になること。

ウ ただのあいさつが雑談になり、そこから議論に発展すること。

エ ただの顔見知りが、安心感や信頼感を覚える存在になること。

問 4

1

5

 にあてはまることばを、次の中から一つずつ

選び、それぞれ記号で答えなさい。ただし、

2

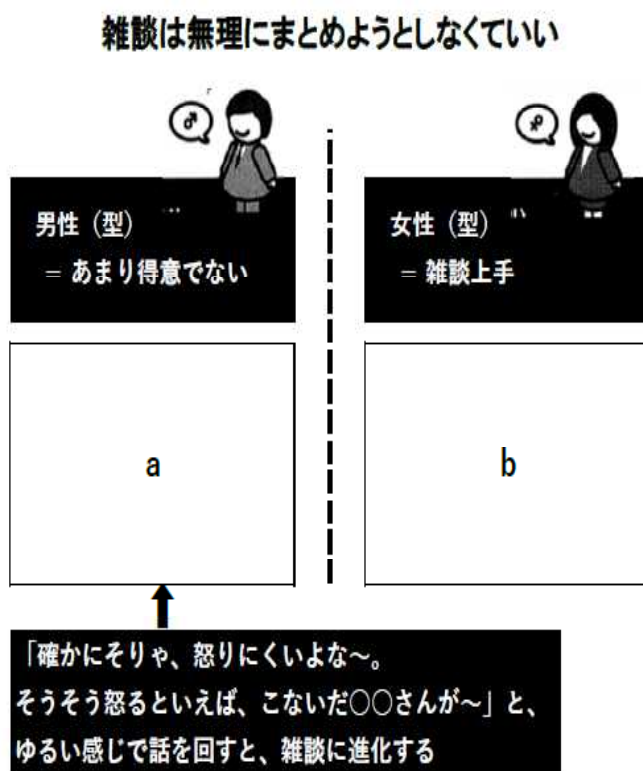
 と

3

 は順番を問いません。

ア 雑談 イ 議論 ウ 異論
エ 結論 オ 反論

問5
【3】の内容を次の図にまとめました。ア～カのすべてを【a】・【b】のどちらかに入れて図を完成させなさい。



ア 中身が話題にまとまりや一貫性がない
 イ オチや結論を求めたがる
 ウ 話を締めにかかる
 エ 話が延々と続く
 オ 話は飛ばない
 カ 話が飛ぶ

問6
【1】～【3】のタイトルとしてふさわしいものを次の中から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。

- | | | |
|---|--|--|
| <p>【1】ア 雑談で「人との人間関係」をつくっている
 イ 雑談は「中身がない」ことに意味がある
 ウ 「意味のない話、ムダ話」は雑談でない</p> | <p>【2】ア 「型どおりのあいさつ」が雑談に成長する
 イ 雑談は「あいさつ+α」でできている
 ウ 「あいさつが雑談そのもの」である</p> | <p>【3】ア 雑談には「議論」が必要である
 イ 「柔軟性」は雑談にはいらない
 ウ 雑談に「結論」はいらない</p> |
|---|--|--|

【二】 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

「おい、俺の友達をいじめた奴はどいつだっ」

空き地で遊んでいた上級生たちに向かって怒鳴った。

缶蹴りをしていた上級生たちが、振り返った。何人かは見覚えがある。確か四年生だ。対するこちらは二年生。体格だけでも一回り違う。

「何だあ、この生意気なガキは」と上級生の一人が馬鹿にしたような笑い方をした。

「お、こいつ、お坊ちゃんみたいな服を着てやがるぜ。しかも革靴まで履いてやがる。カネ持ちんちのガキか」

空から、雨が **I** 落ち始めていた。

「さっき、俺の友達を泣かせて、ここから追い出したのは誰だと聞いているんだっ」

「うるせえぞ、こら」上級生の一人が険しい顔で進み出て来た。

「俺がやったんだとしたら、どうだってんだ、この野郎。文句あんのか」

相手は背が高く、腕っ節も強そうだった。だが、**a** ひるんだりしなかった。

「俺が相手だ。一対一でやる気あるかっ」

「ふん、お前みたいなガキんちよ相手に、大勢でかかったりするかってんだ」

他の四年生たちが場所を空けて、少し下がった。みんなにやにやして見ている。振り返ると、空き地の外で、クラスの仲間たちが心配そうに見守っていた。

さきほど降り始めた雨は、みるみるうちに強くなっていた。

「ほら、どうした。かかって来いよ」

相手がそう言った次の瞬間、飛び込んで片足を捕まえ、頭で

相手の腹をぐいと押した。相手が「うわっ」と転倒する。⑥ **す**かさず馬乗りになって、顔にバチンとげんこつをお見舞いした。

それだけで相手はもう戦意を失ったようだった。先に立ち上がって「どうだ、まだやるかっ」と怒鳴りつけると、相手は **©** あぐらをかいて、涙目で殴られたほおをさすりながら、力なく頭を振った。

二人とも、泥だらけになっていた。雨が強くなって、ざーという音と共に降りかかっていた。

「今度、俺の友達をいじめたら承知しないからなっ」

他の上級生たちも睨みつけてやった。みんな、強張った顔で目をそらした。

空き地の外に出たところで、クラスの仲間たちが大歓声で迎えた。だが、仲間の輪の中に入ろうとしたときに、みんなが口々に「危ないっ」と叫んだ。

見ると、タクシーが猛烈な勢いで迫っていた。

目を覚ました和広は、大きく息をついた。

外は雨降りか。カーテンがかかっていたけれど、音で判る。

雨の日が続くと、どういうわけだか、同じような夢を見てしまう。そして決まって、**※** 神風タクシーにひかれそうになったところで終わるのだ。いったい、どうなっちゃってるんだろうか……。

夢の中の自分は、自分のようだけれど、自分ではない。なぜかという、**①** 夢の中の彼は、現実の自分とは正反対の、カネ持ちの子らしいからだ。今までに見た夢をつなぎ合わせると、彼は大きな家に住んでいた、お父さんお母さんに百貨店に連れて行ってもらったり、山の別荘に出かけたりしている。そして、何よりも現実の自分と違うのは、彼が勉強もスポーツも大

の得意で、しかも喧嘩が強く、クラスの仲間たちから尊敬されている、というところだ。実際の自分は、勉強もスポーツも並以下だし、クラスの中でもあまりぱつとしない……。

布団の上に座り込んで、寝ぼけた頭でそんなことを考えているときに、「和広、起きなさい。」② 今日はお父ちゃんと駅まで行かなきゃいけないから、急いで」と、お母ちゃんの声がした。和広は「はい」と返事をした。

服を着替えた後、お父ちゃんお母ちゃんと一緒に ※ ちゃぶ台を囲んで「いただきます」と手を合わせた。今朝は麦の混ざったご飯とめざし二匹、それと豆腐のみそ汁。ご飯とみそ汁は昨日の晩の残りだ。みそ汁は温め直されているけれど、ご飯は冷たい。

食べながらお父ちゃんが「傘のことだけ」と言った。「この際、お母さんと和広のも買ったかどうかだろうか。やっぱり梅雨時は、傘が一本きりじゃ不便だしな」

「あら、私はいいわよ」お母ちゃんが、とんでもない、という感じで頭を振った。「買物に出かけるときはいつも和広が帰ってからでいいんだし」

和広も「僕もいらないよ。お父ちゃんと駅まで行ったり、夕方に迎えに行ったりするの、好きだし」と言った。実のところは、自分だけの傘が欲しかったけれど、家にあまりおカネがないので、わがままを言うつもりはない。

和広の家には、傘が一本しかない。黒い綿の洋傘で、何度も修繕してあるせいで、※ つぎはぎや違う色の縫い目がある。綿の洋傘は雨を吸うから、濡れるとすごく重たくなる。その代わり、ナイロンのやつは半分以上の値段で売っている。③ お母ちゃんによると、ナイロンの洋傘一本買うおカネがあったら、米を ※ 七升ぐらい買えるらしい。洋傘はそれぐらい高い、簡単に

は買えないものだ。

家族三人が一本の傘で何とか過ごすことは、一応できている。雨降りの日、和広はお父ちゃんと一緒に駅まで行く。そこで別れて、和広は傘を差して学校に行く。お父ちゃんは、電車に乗って会社に行くのだけれど、降りる駅から会社までは ※ ガード下を通って行けるから濡れないで済む。お母ちゃんは、和広が学校から帰ってから、買い物に行く。夕方になってもまだ雨が降っていたら、和広が駅まで傘を差してお父ちゃんを迎えに行く。そうすれば、家族三人が一本の傘で済ませることができるのだ。

お父ちゃんは会社で一所懸命働いてるのだけれど、会社があんまり儲かっていないらしくて、給料が少ししかもらえない。でもお父ちゃんは、頑張って働けば、いつかもっといい暮らしができるようになるって言っているし、和広もそのとおりだと思ふ。

お父ちゃんと同じ傘に入って駅まで歩き、そこで見送った。和広が「ばいばい」と手を振ると、お父ちゃんも手を振って「勉強、しっかりして来いよ」と言った。そこで和広が「お父ちゃんも仕事しっかりね」と返事をする、お父ちゃんは改札の方にいったん行きかけてから、また戻って来た。

「よし、お父ちゃんも今日一日頑張るから、和広も頑張るんだぞ。男と男の約束の握手をしよう」

お父ちゃんに手を差し出されて、和広はごつい手を握った。お父ちゃんの手は大きくて、握手しただけで何だか気持ち温かくなるような、安心できる感じがした。

駅から学校に向かう途中、和広はお父ちゃんと握手をした右手を使うのがもったいなくて、ポケットに入れ、左手で傘を差

した。

学校の近くまで来たとき、クラスの女子、平野邦子と出会った。

「あつ、いーけないんだ。ポケットに手を入れて歩いたら」

「余計なお世話だよ」

「竹林君の傘、大人用じゃないの」

「それでも余計なお世話だよ。大きい傘の方が濡れにくいもんね」

実際、自分だけの子供用傘っていうのもいいなとは思いうけれど、④お父ちゃんの傘を使っていることは、なかなかいい気分だった。

道には泥で濁った水たまりがいくつもあった。平野邦子は赤い長靴を履いており、平気で水たまりの中を歩いている。和広は長靴を持っておらず、いつもと同じ※ズックだから、そういう真似はできない。とはいっても、ここまで歩いて来て、ズックはとつくに泥んこまみれになっているから、今さら水たまりに入ったとしても、たいして違いはない。

和広はズックが濡れるかどうかということよりも、水たまりに自分が映ることが気になるのだった。水たまりを踏みつける瞬間、水たまりに映る自分が同じ動作で踏み返そうとする。そして踏みつけると、波紋が揺れて、水たまりの中の自分が見えなくなってしまう。それが、自分で自分を踏みつけて消し去ってしまっているようで、何だか嫌だった。

もしかすると、水たまりに映る世界が、夢に出てくるもう一人の自分の世界なんじゃないだろうか——ふと思いついたことだったが、和広は何となく、⑤その考えが気に入った。

そうなんだ、きっと。水たまりに映る世界は

Ⅱ

。だから、夢の中の自分はカネ持ちの子で、勉強もスポーツも得

意で、喧嘩も強いんだ。

（山本甲士 『ALWAYS 三丁目の夕日』）

※（文中のことばの意味）

神風タクシー …… 昭和三十年代、交通法規を無視して乱暴

ちやぶ台 …… な運転を行っていたタクシー。

つぎはぎ …… 床に座って使用する食卓。

七升 …… 破れた所に当て布をし、修理した箇所。

ガード下 …… 約一〇五〇〇グラム。一升は約一五〇〇グラム。

ズック …… 鉄道の高架の下。

ズック …… 厚手の布で作られた靴。

問 1

~~~~~線①②③のことばについて、文中における意味として最もふさわしいものを次の中から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。

① ひるんだり

ア 余裕よゆうと思い、気をゆるめたり  
イ がまんできなくて、動き出したり  
ウ いやになって、逃にげ出したり  
エ おそれて、勢いがゆるんだり

② すかさず

ア 間をおかず  
イ 勢いよく  
ウ とりあえず  
エ すきを見て

③ あぐらをかいて

ア 地面にひざをつきあやまつて  
イ 顔中に汗をうかべて  
ウ 両足を前に組んですわつて  
エ 顔をゆがめて泣き出して

問 2

I にあてはまることばとして、最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア しんしんと      イ ざあざあと  
ウ ぽつぽつと      エ ごろごろと

問 3

——線①「夢の中の彼かれ」と表現しているのはなぜですか。それを説明した次の文の□にあてはまることばを、五字程度で答えなさい。

現実の自分と夢の中の自分は□だから。

問 4

——線②「今日はお父ちゃんと駅まで行かないかやいけない」とありますが、なぜですか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア ちようどお父ちゃんと駅の方ほう向むかう時間じかんが重おもなつたから。

イ お父ちゃんと親子の会話をしして駅まで行くのが楽たのしみだから。

ウ 外は雨が降ふっているのに和広の家には傘が一本しかないから。

エ 雨の日はぬかるんでいてすべりやすくお父ちゃんに守ってもらえるから。

問5

——線③「お母ちゃんによると、ナイロンの洋傘一本買うおカネがあつたら、米を七升ぐらい買えるらしい」とありますが、この表現から読み取れることとして、最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア お母ちゃんという呼び方から、和広は母親につねに甘えているということがわかる。

イ ナイロンということがばから、ナイロンの製品が世間に出回りだした時代であるということがわかる。

ウ 洋傘一本という表現から、外国製品に強いあこがれをもっているということがわかる。

エ お米をたとえにしているところから、和広の家は日々の生活にせいっぱいであるということがわかる。

問6

——線④「お父ちゃんの傘を使っていることは、なかなかいい気分だった」とありますが、そのような気分になるのはなぜですか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 大きな傘は子供たちの中で目立つから。

イ 父親とつながっているという気分になるから。

ウ 自分だけが大人用の傘を使っているから。

エ 高級感があって誰も持っていないような傘だから。

問7

——線⑤「その考えが気に入った」とありますが、どのような考えですか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 現実の自分ではあり得ない反対のことをやってくれる自分が、水たまりの世界に存在するという考え。

イ 水たまりを踏んで、そこに映っている自分を消すことで今の自分が消えて現実から離れられるという考え。

ウ 水たまりに映る世界の自分は、今の自分の夢をかなえてカネ持ちで強い自分になっているという考え。

エ ズックが濡れることを気にせずに、やりたいことをやれる今の自分に満足できているという考え。

問8

II にあてはまることばとして、最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア いつでもどこでも、本当の自分を映し出す世界

イ 上下も左右も、何もかも反対の世界

ウ いつも晴れていて、傘なんかいらぬ世界

エ 誰もが幸せに過ごせて、安心できる世界

問9 文中の表現や内容について説明したものとして、最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 夢の中では和広が裕福な家の子どもとして表現されていることで、逆に夢の中に出てくる上級生たちは、現実の世界では優しい人物たちであることを暗示している。

イ 「缶蹴り」「ちやぶ台」など、現在の生活ではあまり出てこない表現を用いることで、戦後の貧しかった時代を象徴的に描こうとしている。

ウ 母の「あら、私はいいわよ」や和広の「お父ちゃんも仕事しつかりね」など、家族の心の交流を表現することにより、お金よりも大切なものを物語全体に強調している。

エ 「握手をした右手を使うのがもったいなくて」と表現された部分からは、和広が父をしたう心情が伝わり、親子の情愛が深まる効果をもたらしている。

〔三〕 次のことばに関する各問いに答えなさい。

問1 次の――線と同じ性質のものをあとから一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。

① 次の試合相手は、かなり強い。

② その井戸水は、夏でも冷たい。

③ これは、ある人から聞いた話です。

④ 記念式典は、十時より始まります。

⑤ 図書館の中は、いつも静かだ。

ア 君なら、もっと早く完成させられるよ。

イ 一人の選手が、先頭集団からぬけ出した。

ウ 村には、ずいぶん長いつり橋がある。

エ 強風がおさまり、波はおだやかになった。

オ 雪が積もつてくると、交通機関が心配だ。

カ 郵便局は、その先の交差点の角にあります。

問2 次の四字熟語を例にならって、正しく書きかえなさい。  
また、その四字熟語の意味をあとから一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。

誤 正  
(例) 絶対絶命 対 ↓ 体 意味 ア

- ① 晴光雨読 ② 温古知新 ③ 心気一転  
④ 短刀直入 ⑤ 自給自息

ア 逃げ場のない危機的な状況のこと。  
イ 前置きなく本題に入るさま。  
ウ 必要な物資を自国や自分でまかなうこと。  
エ 自分がしたことの報いを自分の身に受けること。  
オ 過去のことを学ぶことで今に生かせる知見を得ること。  
カ 自然に順応し自由で快適な生活を送ること。  
キ あつかましくずうずうしいさま。  
ク 気持ちが良いほうにすっかり変わることを。  
ケ 風流の心を引き起こすおもむきのある自然の事物。  
コ 今も昔も変化せずにあるもの。

問3 次のカタカナ語を熟語で表すとどうなりますか。最もふさわしいもの一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。

- ① プログラム ② スローガン ③ ストック  
④ キャンセル ⑤ マナー

ア 在庫 イ 変更 ウ 作法 エ 記録  
オ 解約 カ 演目 キ 標語 ク 規定

四 次の——線のカタカナは漢字に直し、漢字は読みを答えなさい。

- ① 地球温暖化は人類のシカツ問題だ。  
② 災害後のフツキュウ工事が進む。  
③ 今日は家庭ホウモンの日だ。  
④ 日が暮れたのでイエジを急いだ。  
⑤ 西本願寺にサンパイしました。  
⑥ 尊い命を大切にしましょう。  
⑦ 天高く馬肥ゆる秋。  
⑧ この道路は自動車の往来が多い。  
⑨ 身を粉にして働く。  
⑩ 我が国は法治国家です。

これで問題は終わりです。